

「保育内容の研究（言葉）」における読み聞かせの選書理由の傾向

八木 義仁

畿央大学教育学部現代教育学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

Motives for choosing picture books for reading to children in study on Methodology for Early Childhood Education and Child Care(Language)

Yoshihito YAGI

Department of Education, Faculty of Education, Kio University

(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

要約 「保育内容の研究（言葉）」の授業における読み聞かせの選書に着目し、学生の選書理由の記述を基にその傾向について検討した。その結果、絵本の絵や文章を基に選書している学生が多く、幼児の想定を基にした学生が少ないこと、幼児の想定あるいは絵本の絵や文章を基にしなかった学生は、自身の幼少時の読書経験を重視して選書していること、選書にあたっては、分析的にとらえるのではなく印象を重視して選書する傾向にあることが明らかになった。これを踏まえて、今後の本授業における選書指導の充実を図るため、読み聞かせの実際を理解すること、絵本を分析する観点や方法を身につけることを加えて指導することを示した。

Keywords：読み聞かせ 選書 絵本 幼児

1. 研究の目的及び方法

本稿の目的は、「保育内容の研究（言葉）」の授業における実践的な学修である読み聞かせの選書に着目し、学生の選書理由の傾向を明らかにするとともに、今後の選書指導の充実を図るために加えて指導する事項を示すことにある。本稿で対象とする読み聞かせは、幼稚園や保育所において、教諭や保育士（総称して以下保育者と表記する）が行うものに限って考究する。それは、読み聞かせという活動は、保育者だけが行うものではなく、親をはじめ多様な立場の者が行う活動であるため、立場によってその意図が異なるからである。本授業の目的から考え、保育者の位置から読み聞かせをとらえる必要がある。

「保育内容の研究（言葉）」では、保育理論の学修とともに、実践的な学修を設定している。かるたや絵本の制作、ことば遊びや手遊び歌、読み聞かせなどがそれである。その中でも読み聞かせは、毎時間3、4人程度の学生が、自ら選んだ絵本を学生の前で読み聞かせるといった実践的な学修であり、第4回から第15回の授業まで帯で実施している。

保育に携わることをめざす学生にとって、読み聞かせの知識・技能を身に付けることは必要不可欠である。読み聞かせについて、幼稚園教育要領解説では、「現実には自分の生活している世界しか知らない幼児にとって、様々なことを想像する楽しみと出会うことになる。登場人物になりきることなどにより、自分の未知の世界に出会うことができ、想像上の世界に思いを巡らすこともできる。このような過程で、なぜ、どうしてという不思議さを感じたり、わくわく、ドキドキして驚いたり、感動したりする。また、悲しみや悔しさなど様々な気持ちに触れ、他人の痛みや思いを知る機会にもなる。このように、幼児期においては、絵本や物語の世界に浸る体験が大切なのである。」¹⁾と述べているように、言語を通して、幼児が虚構の世界で遊ぶことを体験できるものであるとともに、現実世界の読者としての心の揺れを体験できるものでもある。これは、文字を文章として自由に読むことができるようになれば、一人で読むことによって体験できるようになるが、文章として自由に読めない幼児にとって聞くことによって体験できることになり、読み聞かせは重要なものと位置づけることができる。

2018年4月5日 投稿 2018年5月8日 受理

また、「絵本や物語などを読み聞かせるときには、そのような楽しさを十分に味わうことができるよう、題材や幼児の理解力などに配慮して選択し、幼児の多様な興味や関心に応じることが必要である。」²⁾とあるように、読み聞かせを充実したものとするためには、選書は重要である。

研究の方法は、まず、本授業の読み聞かせに関する概要と選書の指導の現状を概観する。次に、読み聞かせの選書に関する先行研究などから選書の観点を示し、これを踏まえて、学生の選書傾向を考察する。その上で、学生の選書理由の傾向の現状と、読み聞かせについて保育者として身に付けておくべき選書の考えとを合わせ、今度の選書指導の充実を図るために加えて指導する事項を示したい。

対象とする学生は、2017年度後期に本授業を履修した学生である。学生に選書理由を自由記述で書かせ、その記述内容の第1理由を中心に考察する。一般的に質問について回答する際、多くは思いつものから回答する。したがって、学生が選書理由を問われたとき、第1理由は最も重視する理由と判断できる。

2. 「保育内容の研究（言葉）」における読み聞かせ

読み聞かせは、学校や幼稚園、保育所で行われるだけでなく、一般家庭でも行われる。また、図書館などをはじめとする公的機関や私的機関で行われるものもある。

本授業で取り上げる読み聞かせは、保育者が保育する幼児たちに行うという限定的な場におけるものである。したがって、親が子どもに向けて行う読み聞かせのように、1対1の構成（状況によっては1対2、3のように子ども数によって変化する）で実施されるものではなく、1対多で構成される読み聞かせを対象とする。

2.1. 読み聞かせの概要

実際の保育における読み聞かせでは、絵本を読み聞かせるだけでなく、導入するための活動や読後の活動を含めて行われているが、本授業においては、中心部分である読む活動のみを取り上げている。

本授業における読み聞かせに関する学修の内容は、主として、絵本を聞き手に見せながら声に出して読むという行為を体験することにある。絵本を読み手の右側・左側のどちらに位置すればいいのかという絵本と読み手の位置、絵本のどの部分をめくって次のページに進めるのかというめくり方、読み声の大きさや速さ、間の取り方などの読み方など、実践する際の基礎的技術を学んでいるということが出来る。

授業では次のように展開している。まず、学生が前

に立ち、絵本を示し、選書理由や対象年齢について話す。本授業における選書は自由選書で、学生が自由に絵本を選び読んでいる。次に、表紙から見返し、扉、本文へと順々に読み、最後に裏表紙まで読んで終わる。特に絵本の場合は、見返しや扉、裏表紙も本文との関連が深くなるようにしていることがあるため、本文だけでなく、すべてのページを丁寧に扱うことが重要である。

読む時には、本来は聞き手である幼児の表情などの反応を見ながら読み進めるものであるため、授業でも読み手である学生は、聞き手の学生の様子をうかがいながら読み進めることが必要となる。しかし、現状は、読むことに精一杯の学生が多く、聞き手の様子まで見ながら読める学生は少ない。

3. 選書

読み聞かせをするための絵本は、どのような観点を基に選書すべきなのだろうか。目の前にいる多数の幼児に保育者が選んだ絵本を読み聞かせするという構造から見ると、選書の観点として、どんな幼児に読み聞かせをするのかということと、どんな絵本を読むのかということが挙げられる。

3.1. 幼児の想定

本授業で取り上げる読み聞かせは、保育者の目の前にいる幼児に対して行うものである。したがって、その幼児がどのような状況にあるのかということを想定することは重要である。

幼児を想定することが必要なのは、例えば、藤岡・伊藤(2016)³⁾の研究から理解できる。藤岡・伊藤は、対象とした幼稚園の3年間の保育記録から選書の傾向を明らかにしている。それによると、3歳児では、1学期の傾向として、読み聞かせの場の定着を意識した選書を行っている。また、3、4、5歳児の3学期は、季節や行事に関連する絵本が多いことを指摘している。また、横山・水野(2008)⁴⁾は、10年以上の経験のある保育者を対象にして、集団保育の場における読み聞かせの意義について検討した。その中で、保育者が、「子どもの生活・興味」、「季節感」、「行事」との関連に留意して選書していることを指摘している。現場の保育者たちは、対象となる幼児の日常生活や行事、季節などを考慮して選書しているのである。

また、Trelease(1987)は、子どもの年齢と成熟度を考えて選書することを述べている。例えば、「生後六ヵ月から一〇ヵ月の乳児の視力と聴力は、見慣れた顔、もの、声などを見分けたり聞き分けたりできるまでに発達している。従って、これ以後の子供のために

選ぶ本は二つの感覚を刺激するもの—すなわち、子供が容易に精神を集中させることのできる色彩豊かな絵や、好奇心をそそる音のあるものでなければならない⁵⁾や、「一四ヶ月の幼児はまだ平面図から立体図を連想するという複雑な思考過程の戸口に立ったばかりである。そんな時期の子供の思考を手助けするために、あなたは単純な絵—ページに一つのものだけを描いた絵、できることなら色のあるもの—のついた本を選ばなければならない⁶⁾と、子どもの発達を考慮した選書を指摘している。

このように、聞き手である幼児を想定することは、選書する上で重要な観点である。

3.2. 絵本の絵や文章

絵本を使って読み聞かせをする以上、その絵本のよしあしに着目することは当然のことである。

絵本の選び方について、松居（1981）は、絵で展開を物語っているもの、絵の形が物語を表現しているもの、「いつ・どこで・誰が」などが明確に書かれているもの、文と絵が一致しているもの、テーマが子どもにも分かるように表現されているもの、⁷⁾などを挙げている。また、瀬田（1985）は、よい絵本について、識者の見方を引用しながら、はっきりしたテーマをもつもの、小さい子のわかる親しい主人公が出てくるもの、立派な絵で挿し絵してあるもの、⁸⁾を挙げている。

これらは、絵本の絵や文章について、テーマの明確さ、絵や文章表現の豊かさなど、絵本自体のよさについての言及である。つまり、選書にあたっては、単に絵本に着目すればよいというわけではなく、絵本についての分析的な価値判断を求めている。

3.2.1. 絵本の絵

絵について着目すべきところは、絵本の展開や絵の形などである。

絵本の展開について松居は、「すぐれた絵本は、絵が子どもに物語を語りかけてくれるものです。」⁹⁾と、画面を連続してみていくと、主人公はもとよりそれを取り巻く人物や、事件の起きる移り変わりも読み取れるという。また、鳥越は、よい絵本の見分け方について「文のほうをぜんぜん読まないで、絵だけを見てみるという方法があります。それでおおよその内容がつかめるようでしたら、それはいい絵本ということができます。」¹⁰⁾と、松居と同様に、絵で展開がわかるものが子どもに与えるのによい絵本であると述べている。文字を自由に読めない幼児にとって、絵本の絵の展開を通して絵本の世界に入っていくことから考えると、絵の展開から選書することは非常に重要である。

また、松居は、「絵本の絵は、“かわいらしい”“色が明るくて美しい”といったことは、実は重要な条件ではありません。大切なことは、“その絵がどれくらい豊かに物語を表現しているか”で、それには色よりも形が問題です。」¹¹⁾と述べ、色よりも形を重視する必要性を説いている。さらに、松居は、「色は向こうから目に飛び込んでくるが、かたちは注目し、認知し、解釈しなければならぬ。」という精神科医の辻悟の言を引いて、形に着目する重要性を述べている。

絵本を選書する場合、絵については、絵を見るだけで展開が理解できるもの、絵の形が豊かな表現であるものなどが重要な規準である。

3.2.2. 絵本の文章

絵と文章で表現されている絵本において、絵と並んで文章も重要な要素である。作者は、多くの言葉から最もふさわしい言葉を選び、その選ばれた言葉を最も適した順序に並べて文章を作るのである。したがって、何がどのように書かれているかを分析することは非常に重要である。

特に、冒頭部は、重視したいところである。読者が物語の世界へ入り込むのは、語り手が冒頭で人物や状況の設定を語るからである。その語り手が伏線となり、展開や結末で、読者は登場人物に同化したり異化したりしながら物語の世界を楽しむことができるのである。冒頭部での設定がきちんと語られず曖昧のままの物語は、登場人物のおかれた状況も背景も不明確のまま展開し、内容の薄いものとなる。絵本でも物語性のある絵本では、このような考えを適用する必要がある。

鳥越は、「いつ、どこで、だれが、という語り口こそ聞き手にとって最も鮮明にイメージの描けるやり方」であり、「子どもの本にとって、とくに読者が小さければ小さいほど、書き出しによってその本の価値が決まるといっても、決していいすぎではないのです。」¹²⁾と述べ、冒頭部の重要性を指摘している。また、松居も鳥越と同様に、「絵本の物語を考えるときに大切なことは、“いつ・どこで・だれが・なにを・どうして・どうなったか”ということが、順序よく、はっきりと、わかりやすく書かれていることです。（中略＝八木）この三つの要素（いつ・どこで・だれが＝八木）が、まず物語の発端ではっきりと語られなければなりません。」¹³⁾と、物語の世界へと誘う入口である冒頭部の設定を重視している。

絵本の文章表現について分析しなければならない点は冒頭部だけでなく、展開や構成、冒頭と結びとの関係など、多くの点について検討しなければならないが、鳥越もいうように、冒頭部によって物語の価値が左右

されるほどである。よい本を選書する場合、冒頭部をまず検討することが必要である。

以上、絵本の絵と文章について検討したが、絵だけが、あるいは文章だけがよいものであればよい絵本ということにはならない。絵と文章が一体化し、豊かな表現となって初めてよい絵本となる。

4. 学生の選書理由

2017年度の「保育内容の研究（言葉）」履修学生に、その学生が読み聞かせを担当する時に選書理由を記述してもらった。記述項目は、日付、学籍番号、氏名、絵本の題名、作者等名、選書理由である。期間は2017年10月から2018年1月までで、履修学生84人の回答を得た。なお、記述した用紙の回収は、当該授業の担当者が行った。

選書理由の分析にあたっては、第1に挙げた理由について検討する。それは、学生が最も重視した理由が第1の理由だと判断したからである。もし1文の中に2つの観点が併記されている場合は、先に書かれたものを第1理由、後に書かれたものを第2理由とした。その結果として、84人から第1理由から第3理由まで、のべ149の理由が挙げられた。

選書理由は、その根拠を聞き手に求めるもの、絵本に求めるもの、読み手に求めるもの3つの観点に分類する。それは、読み聞かせが、聞き手・絵本・読み手の、3要素で成り立つという構造のためである。そこで、聞き手である幼児の日常生活や行事、発達などに関わらせた理由（以下、A類とする）、絵本の絵や文章などに関わらせた理由（以下、B類とする）、読み手である学生の読書経験や読後感想などに関わらせた理由（以下、C類とする）として検討する。

4.1. 選書の第1理由

選書の第1理由は、A類4人（4.8%）、B類44人（52.4%）、C類36人（42.9%）であった。絵本の絵や文章と関わらせた理由を挙げた人が最も多く、約半数の52.4%である。次いで、読書経験や読後感想などに関わらせた理由を挙げた人で42.9%である。幼児の日常生活や行事、発達などに関わらせた理由を第1理由に挙げた人は4.8%に止まった。

現場の保育者や研究者はA類やB類を重視していることを先述したが、対象とした学生はA類とB類をあわせて57.2%で、残りの約40%は自分の読書経験などから選書しているという結果であった。

4.1.1. A類

第1理由として幼児を想定したA類4人の内訳は、行

事や季節を考慮したのが3人、言語能力の向上を考慮したのが1人だった。

行事や季節を考慮したものは、「時期的に、幼児は遠足でもほりに行くかなと思ったから。」「今の季節にぴったりだと思ったから。」「もうすぐクリスマスだったので、サンタさんのお話を選びたかったからです。」で、秋から冬への行事や季節を想定している。これは、本授業が後期の授業で、自分の読み聞かせの担当時と幼児の生活とを考慮して選書していると推測できる。

また、言語能力を考慮したものは、「少し難しい言葉が出てくる部分もありますが、小学校へ入る前の段階として、いろいろな言葉に触れることが子供にとってもよいと思いました。」で、語彙の育成を視野に入れていることが分かる。

このように、保育者が重視する選書理由と同様にA類を第1理由に挙げている学生がいるものの、非常に少数であった。第1の理由にA類が少ない要因として、本授業が1回生後期開講の授業であるため、幼児教育の実際現場に関わる機会の少なさが挙げられるだろう。学生は、ある程度の期間、あるいは年間を通して実際どのように読み聞かせをしているのかを保育者の側から見た経験はほとんどない。したがって、幼児の日常生活や行事などを考慮して選書することに気づきにくかったと考える。

4.1.2. B類

絵本の絵や文章に着目したB類は最も多く、44人（52.4%）であった。絵本を選ぶ場合、絵や文章に着目することは重要なことである。この点では、約半数の学生が絵本の絵や文章に着目したことは意義深い。しかし、それだけでは十分とはいえない。絵や文章をどのようにとらえたかが問題となるからである。

B類の中で絵に着目したのは44人中25人であった。その記述内容を見てみると、15人は、絵が「かわいい」または「かわいらしい」という言葉を使っている。この記述から、絵の形や色彩という分析的な見方ではなく、直感的・情緒的に選択していることがわかる。

また、絵のタッチや構図、効果について、「絵がすごくやさしい」、「絵柄が面白い」、「絵がとてもわかりやすい」、「絵にインパクトがある」という記述をしているものの、具体的な絵のどの部分についてとらえているのかが明確には分からない。

色彩については、「イラストがカラフルで」、「様々な色が出てきて彩(ママ)やかできれい」という記述があった。いずれも多色で描かれているところに目をつけ、絵のよさと考えているが、具体的にその多色がど

のように効果的なのかは記述していない。

このように、絵に着目した学生は、多くの場合「かわいい」という言葉に象徴されるように、絵を直観的・情緒的に受け止めて選書したり、絵の構図や色彩といった観点で絵をとらえた学生も、具体的部分というより全体的印象というとらえ方をしたりしている。

一方、文章に着目したのは19人であった。しかし、その中に、冒頭部について記述している学生はいなかった。人物設定5人、プロット4人、主題4人、題材3人、題名2人、方言1人であった。人物設定やプロットは、人物がどう描かれているかや物語がどう展開しているかという、状況設定に並ぶ物語の基本的な構成要素であり、適した着目点である。また、主題や題材、題名は、物語全体を包括するところである。

登場人物では、例えば、「お姉ちゃんだから、お母さんの迷惑にならないようにと思って一人で一生懸命やろうとしている、なっちゃんの姿が素敵だと思った」、「だるまちゃんがてんぐちゃんの持っているいろいろな物をほしがってないものねだりをしている姿がとても可愛い」と、具体的人物を挙げて記述しているものがあつた。登場人物がどのように設定されているかという分析的な記述ではないが、物語の基本的な構成要素には着目している。

展開では、「トンネルをくぐると言葉が変化するのが面白かった」、「子どもでも、次のページの予想ができる本」という記述があつた。トンネルをくぐることやページをめくることによって、次の場面への展開が行われ、しかも聞き手が推測しながら読み進められることをとらえている。

主題や読み手が受け止めたメッセージについては、「子どもの人や動物への愛情の心を育てられる絵本だと思う」、「みんなで助け合えばたとえ困難なことでも乗り越えられることができるから助け合いは大事ということがトマトさんの話を通してわかるような絵本だった」という記述があつた。これらは絵本の内容から学生が受け止めたものであるが、自分への受け止めだけでなく、「生き物への愛情の心を育てたい」、「助け合いの大事さを感じてほしい」という幼児への思いを含んで記述していることがうかがえる。

このように、文章についても、部分的な印象にとどまっているものが多く、分析的にとらえ記述した姿はほとんど見られなかった。

4.1.3. C類

C類36人の記述内容を見ると、36人中28人が自己の幼少時の読書経験を理由に挙げている。「子どもの頃によく読んでもらって、楽しかったからです。」や「自

分が幼稚園だった時、とても好きでよく読んでいました。」など、読み聞かせてもらった経験や自ら読んだ経験を高く評価して記述している。よい読書経験をもたらした絵本は、読み聞かせに値する絵本であるという考えであることが推測される。

Treleaseは、「あなた自身が楽しいと思わないものは、読まないこと。読み聞かせているうちにあなた自身の嫌悪感があらわになり、せつかくの目的を頓挫させてしまう。」¹⁴⁾と述べている。これは、読み手の目的を頓挫させないために、読み手が楽しいと考えた読書経験や読後感想をもって選書することを否定していない。重要なことは、どんな目的のために、自分の読書経験や読後感想を本に選書したのかということである。今回の回答には、その目的を記述した例は見られず、自分自身のよい読書経験を規準にして選書したといえることができる。

5.結び

本稿では、選書の第1理由について検討し、次のような傾向をとらえた。

- 絵本の絵や文章を第1理由にして選書している学生が最も多く、読み聞かせの対象となる幼児の想定を第1理由にした学生が少ない。
- 対象とする幼児や絵本の絵や文章を第1理由と考えず選書した学生は、自分の幼少時の読書経験を重視して選書している。
- 選書にあたっては、分析的にとらえて選書するというより印象を重視して選書する傾向にある。

以上は、第1理由から見られた傾向であるが、第3理由までのすべてを含めても、絵本の絵や文章に関わらせた理由（B類）、読書経験や読後感想などに関わらせた理由（C類）、幼児の日常生活や行事、発達などと関わらせた理由（A類）の順となった。また、すべての理由を見ても、分析的にとらえている理由は少なく、印象重視という結果であった。

その要因として、次の2点が見出せる。

- 履修時まで、実際の保育現場における読み聞かせに関わる機会が少ないため、保育者の目的や意図を十分に理解するまでには達していない。
- 絵本を分析する観点や方法についての知識と技能が十分に身についた状況には達していない。

本授業は、1回生後期に開講されているため、学生が本授業の履修時までには実習やボランティア等で一定期間現場に関わる経験は少ない。したがって、実際に行われている読み聞かせについて見聞する機会も少ないことが推測される。このような状況において、学生が実際に保育者の意図や目的までを考慮して選書する

ことは難しいことである。

また、学生と絵本との関係を考えて、幼少時に絵本を読んで楽しんだ経験はあるだろうが、現在に至るまでに、絵本を分析し、そのよさを考えた経験は少ないだろう。したがって、分析の観点や方法の知識をもち、分析する能力を十分備えている状況ではないため、分析的にはとらえられないと考える。

これらのことを踏まえて今後の本授業での読み聞かせの指導について考えると、これまでの指導に、読み聞かせする絵本の選書の仕方について、次の2点を加えて指導することによって、読み聞かせに関する指導の充実が図れると考える。

- 実際の保育者が、いつ、何のために読み聞かせを行っているかを取り上げ、読み聞かせの実際を理解できるようにする。
- 絵本を分析する観点や方法を示し、実際に絵本の絵や文章を分析することを通して身につけられるようにする。

保育における読み聞かせは、言語を通して、幼児が虚構の世界で遊ぶことを体験できるものであるとともに、現実世界の読者としての心の揺れを体験できるものであり、幼児期において、このような虚構の世界に浸る体験は大切な体験である。また、その体験をさせようとする際には、保育者は、絵本の題材や幼児の理解力などに配慮して選択することが重要となる。

これを踏まえて、まず、1点目である。保育者が行う読み聞かせは、幼児の集団を前にした場面で実施される。保育者は、絵本の選択にあたって、幼児への指導の目的をもって意図的に選択する。このことから、今後の本授業においては、保育者の幼児への指導の目的を明示した選書の実例を提示し、学生目を幼児に向けさせたいものである。それによって、幼児の日常生活等に目を向けて選書することに改めて気づくのではないかと考える。また、自らの読書経験から選書しようとする学生も、幼児期に読んだその図書について、日常生活等という側面から改めてとらえなおしてみても選書するようになることが期待できる。

次に、2点目である。絵本が、あるテーマに基づき、絵と文章によって創造されるものであることから、絵と文章を吟味して選択することは重要なことである。絵と文章について詳細な分析ができるようになると、よりよい選書が可能となる。しかし、熟達するには相当の時間を要する。本授業においては、その時間も限られているため、まず、分析の観点を知り、実際に分析を試みる実践的な学修が必要であると考え。絵だけで読めるものか、冒頭の文章は虚構の世界へと誘える記述か、などをはじめとして分析してみることを体

験できるように計画することである。その繰り返しが、より深い分析に結びつく。熟達を図ることについては、時間的な制約から今後の他の授業や実習までの自発的な取り組みに委ねる。

本授業ではこれまで、絵本を実際に読み聞かせする活動を重視して指導されている。これによって、実際に人前で読み聞かせする体験をし、保育者の読み聞かせの行為の手順を実感的に理解しているということが出来る。さらに、今後は選書にも目を向け、実際の保育者の選書について理解したり、絵本を分析的にとらえたりする指導の充実を図ることによって、読み聞かせについての理解をいっそう深め実践に結びつけることを期待したい。

謝辞

当該授業において指導されている倉窪啓子先生には、記述用紙の配布並びに回収をしていただき、本研究へのご協力を深く感謝いたします。

文献

- 1) 文部科学省：幼稚園教育要領解説，213，2018
- 2) 同上書，218
- 3) 藤岡久美子・伊藤恵理奈：幼稚園における絵本の読み聞かせの選書の分析－3年間の記録から－，山形大学教職・教育実践研究，11，59-68，2016
- 4) 横山真貴子，水野千具沙：保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義－5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から，奈良教育大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，17，41-51，2008
- 5) Jim Trelease著 亀井よし子訳：読み聞かせ このすばらしい世界，高文研，107，1987
- 6) 同上書，112
- 7) 松居直：わたしの絵本論，国土社，79-101，1981
- 8) 瀬田貞二：絵本論－瀬田貞二子どもの本評論集－，福音館書店，48-49，1985
- 9) 前掲書7)，81
- 10) 鳥越信：子どもの本の選び方，風間書房，88，2012。(本書は1973年に三省堂から『子どもの本の選び方・与え方』として出版されたが絶版。その後、1982年に修正が加えられ大月書店により文庫化されたが、絶版。現在は風間書房により2012年に復刻され、書名も『子どもの本の選び方』と改題された。本引用は、『子どもの本の選び方』による。)
- 11) 前掲書7)，88
- 12) 前掲書10)，85-86
- 13) 前掲書7)，89
- 14) 前掲書5)，180